

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 3)

研究題目	ブラジルの日系人社会における日本音楽実践の歴史とその文化的意義の研究——1980 年代を中心に	報告書作成者	淵上ラファエル広志
研究従事者	淵上ラファエル広志		
研究目的	<p>19 世紀後半に海外への日本移民が開始され、移民先である米国や南米など、海外へ日本の文化が持ち込まれた。現在では、海外日系人の人口は推定約 380 万人であるが、その中で、ブラジルの日系人の人数が最大で、190 万人を超えている。ブラジルでは、1908 年から現在まで、110 年以上の移民の歴史を持ち、その過程で、尺八や箏や三味線の和楽器で邦楽や日本民謡などの様々な伝統音楽が実践されてきた。</p> <p>ブラジルの日系社会における音楽活動についての研究に関しては、Dale Olsen(1982、2004)、細川周平(1995、2008)や Alice Satomi(2004)らがブラジルの日系人によるエスニシティと日本音楽の関係という観点から論じている。しかし、伝統的な邦楽や日本民謡で使われている和楽器に焦点をあてて日系人の活動や考え方を扱った研究が十分にあるとは言えない。</p> <p>本研究は、ブラジルの日系人社会において、邦楽及び日本民謡に関わる音楽活動の歴史に光をあてて、その文化的意義を考察することを目的とした。本研究では、尺八、箏、三味線の三つの楽器に着目し、1980 年代を対象として日系人たちの間で伝承・維持・変容してきた日本音楽とそれを巡るアイデンティティーについて明らかにした。</p>		

研究内容	<p>具体的な内容は次のように 5 点に要約できる。</p> <p>(1) 1980 年代にブラジルで発行された邦字新聞や機関紙は、国立国会図書館に『パウリスタ新聞』、『日伯毎日新聞』、『サンパウロ新聞』、『機関紙日系コロニア』、『虹→日本語普及センター会報』、『週刊時報』の 6 つが収蔵されている。この中に、尺八・三味線・箏についての情報が掲載されているのは『パウリスタ新聞』、『日伯毎日新聞』、『サンパウロ新聞』である。この 3 つの新聞を中心とし、伝統的な邦楽及び民謡に関する団体、人物、流派名、曲名、イベント、場所、主催などの調査を行った。</p> <p>(2) インタビュー調査では、1980 年代にブラジルで邦楽及び日本民謡の音楽活動をして、今でもそれを続けている箏曲宮城会の長瀬玲子氏とブラジル都山流の山岡秋雄氏の 2 名へインタビューを実施した。本研究の企画書の段階では 5 名へインタビュー調査をする予定だったが、コロナウイルスの状況下によって調査活動が制限されたので、2 名に減少となった。インタビュー調査をする際、ブラジルの宮城会と都山流に関して、コンサートのプログラムや多くの史料を提供してもらった。</p> <p>(3) 史料を分析するにあたって、邦字新聞から見る「日系社会」の全体を把握し、当時の日系人たちの文化活動と彼らのアイデンティティや、日系社会とブラジル一般社会との摩擦、同化、相互作用について考察した。そして、伝統音楽についての記事や広告等を検討し、当時の日系人たちにとっての邦楽と日本民謡の役割や価値観を明らかにした。</p> <p>(4) インタビュー調査の際、提供された史料に、演奏家名、主催者、曲名などのような詳細情報が書かれていた。そして、長瀬・山岡両氏からは、和楽器の代表者の立場から見た 1980 年代における伝統音楽の演奏と指導の情報を得ることができた。</p> <p>(5) また、本研究を実施することによって、両国の交流の推進力となるような貢献をするために、ブラジルでフィールドワークを行ったうえ、尺八のワークショップ、研究発表と演奏も行った。2022 年 1 月 22 日にサンパウロ市に位置している郷土民謡協会会館にて尺八のワークショップ及び本研究の中間発表を実施した。そして、26 日にサンパウロ市イビラプエラ公園の「日本館」で日系一世の北原民江氏と日系二世の川添コウイチロ氏と共に尺八・箏・三味線の三曲合奏の演奏を撮影した。並びに、同年 3 月 26 日に東京音楽大学にて研究発表及び演奏会も行った。演奏会では、日本に居住している日系三世の青木・デニーゼ・ヒロミ氏と西村満梨氏と共に、尺八古典本曲、地歌、箏曲、日本民謡の演奏を行った。</p>
------	---

研究のポイント	<p>本研究のポイントは以下の4点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 邦字新聞から見る日系社会の文化活動の状況を明らかにすること。 2) 日本音楽団体の活動状況についての証言を収集すること。 3) 日系社会の文化活動と邦字新聞との関係性や影響等について考察すること。 4) 日系人にとっての伝統音楽の価値観や役割等について考察すること。
研究結果	<p>本研究の研究結果は以下の4点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) <u>1980年代には、日系人社会と日本との交流が盛んであった。</u>1980年代に、日本移民が終了したが、日伯交流が盛んであり続け、芸術や教育、またそれに伴うアーティストやスポーツの団体が頻繁に日本からブラジルへ進出した。一方、ブラジルから日本に留学する日系人、また民謡やカラオケ大会の優勝者が日本の大会に出演することが多かった。当時、日伯交流に大きく貢献をしていたのは文部科学省、国際交流基金、また国際協力機構や県人会など、これらの助成金や奨学金なども沢山あった。また、もう一つの日伯交流として重要なのは、「出稼ぎ」だといえる。日系人の日本への出稼ぎは1984年頃からはじまり、1986年後半に一大ブームとなった。経済や政治に限らず、日本音楽界にも出稼ぎ運動の影響が見られる。 2) <u>1980年代は、ブラジルにおいて日本音楽の団体が複数開設された時期で、日本音楽の実践が本格的に展開していく変革の時代にあたる</u>と考える。例を挙げると、〈ブラジル邦楽協会〉、〈ブラジル郷土民謡協会〉、〈生田流正派箏の会〉〈箏曲宮城会ブラジル〉の邦楽器に関わる団体が沢山誕生した。当時の日系社会における日本音楽の成功の理由は次の通りと考える。① 日系人人口は12万人を超えて、増加しつつあった、②ブラジルには和楽器の家元や師範等、いわゆる伝統音楽の指導者が多かった、③助成金や支援等が沢山あった、④日伯交流が盛んであった。 3) <u>ブラジルの邦字新聞は、日系人のアイデンティティーと彼らの文化を維持・確立する役割を果たした。</u>邦字新聞は演奏会等を宣伝することによって、人を集める、集団を作る一つの方法であった。しかも、それだけではなく、日本民謡祭典のようなイベントを主催した。宣伝及び主催は特別な意味を持つ。それは、情報を伝える役割を超えて、日系人たちのアイデンティティーの拠り所となりまとめ、彼らの文化を構築する役割を果たして、日系社会というコミュニティの維持、彼らのアイデンティティーの確立に大きく貢献したといえる。 4) <u>日本民謡は、日系人の間でエンタテインメントを目的として実践されている。</u>一方、古典的邦楽の場合は、娯楽以外、生け花や書道と同様に、<u>ブラジルの一般社会へ日本文化を紹介する、いわゆる日系人と非日系人を繋ぐための音楽でもあった。</u>日本民謡は、民謡大会や県人会の催しや祭礼等、言い換えると日系社会内のイベントで行われ、娯楽のための音楽でありながら、日系社会の維持に大きく貢献した音楽である。加えて、ブラジルの日本民謡大会の優勝者が、来日し、日本の大会に出演することになった。つまり、日本民謡を通して、

	<p>直接に日本社会に繋がることできる。それに対して、古典的邦楽は、ブラジルの一般社会に日本文化を紹介する際に用いられることが多かった。例えば大学での学術的なイベントや SESC(ブラジル商業連盟社会サービス)が主催するイベント、またサンパウロ美術館ホールやサン・ペドロ劇場などで邦楽の演奏会が見られる。古典的邦楽は純日本文化を代表する〈伝統と格式〉の音楽であるといえる。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>今後の課題として、1946 年～70 年代に着目し、邦字新聞から見る日系社会の邦楽界について探求したいと思う。ブラジルでナショナリズムの気運が高まる中、1941 年から邦字新聞が禁止され、1942 年 8 月 22 日にブラジルは第二次世界大戦の連合国と連携したため、日本は敵対国となってしまう、日本語学校や日系人の演奏会等なども禁止された。第二次世界大戦後、1946 年に新憲法の下で、邦字紙の発行や、日系社会の音楽活動等も自由になった。しかも、1952 年ごろ日本移民は再開した。こういった日系社会における日本音楽の歴史や、日系人たちのアイデンティティーについての研究を深めるために、第二次世界大戦後における日系社会の文化活動の復活と、当時の日本音楽の状況を研究したい。</p>



写真 1:サンパウロ市「日本館」にて、演奏動画の撮影。(2022年5月8日に [Bunkyo Digital](#) の Youtube チャンネルに公開された)。



写真 2:2022年1月22日、サンパウロ市郷土民謡協会会館にて、尺八のワークショップと研究の中間発表。



写真 3:『パウリスタ新聞』1983年07月16日 7頁



写真 4:『パウリスタ新聞』1983年01月20日 7頁



写真 5:『サンパウロ新聞』1982年08月14日 10頁